

情報技術の匠

第56回
データベースの匠たくみ

変化を受け入れる。でも、振り回されない。

房はデータベースを軸に、メインフレームに関する技術支援を手掛けている。

「同時に複数のプロジェクトに参加しています。メインフレームのデータベース関連を中心に、要件定義など上流工程から、サービスイン後の運用まで、それぞれ3年ぐらいのスパンでかかわっています」

それぞれのプロジェクトには専任のメンバーがいて、彼女はミーティングや要所で参加し、さまざまなアドバイス、意思決定のための技術情報を提供する。また、時には緊急対応のサポートも行。そこで求められるスキルとセンスは

何か。

「データベースの場合、いろいろな角度から見えないといけません。高いパフォーマンスが要求されている一方で、データベースが動かなくなった瞬間、ほとんどの業務が止まってしまう。となると、可用性の角度から見ること必要です」

可用性とパフォーマンスの両立。さらにパフォーマンスとセキュリティなどのせめぎ合い。

「例えば暗号化。必要以上に暗号化を施してしまうと、パフォーマンス面で問題がありますし、運用も大変になります。どこまでを暗号化するかを、お客様も含め

て検討して、提案をするのも仕事です」

運用のプロ、パフォーマンスの向上について卓越したスキルを持つメンバー、セキュリティの専門家、それぞれが持ち寄る「ベスト」を、いかにバランス良く実現するか。プロジェクトで求められるその決断のために、彼女と彼女のチームによるサポートが必要となる。

いろいろな角度から見なければならぬという中で、課題となることの1つに、新技術のキャッチアップがある。

「メインフレームの場合は、出てきた新しいものをすぐに使うというわけではないのですが、経験半分、勉強半分で対応しています」

矢継ぎ早に新しい技術やプロジェクト、そしてソリューションが生まれてくる現在、長期間にわたるプロジェクトを複数手掛ける際に、話題の新しい技術を目の当たりにして、迷いは生じないのだろうか。

「確かにより性能の高いディスクやCPUなどの新しいハードウェアが出てくれば、その時はどう取り入れていくかを考えます。さらに、それらのパフォーマンスに関しては、実際に自分でテストして、自分で確認をするということも重要



房 律子 (ぼうりつこ)

日本アイ・ビー・エム
システムズ・エンジニアリング株式会社
システム基盤ソリューション
Senior Certified IT Specialist

【プロフィール】

1986年日本IBM入社。1994年より日本IBMシステムズ・エンジニアリングに転向。ほぼ一貫してDB2 for z/OSを中心に、プロジェクトに参加。DB開発・運用設計支援、高可用性システム設計、耐障害設計、パフォーマンス・チューニング、災対システム設計、DBセキュリティなどの設計、実装の技術支援を担当。現在、データベース技術者の裾野を広げるため、DB2zコミュニティを主催。さらに組織横断的なテクニカル・コミュニティにも参加し、グローバルな活動も行っている。

です」

新しいものに対しては、柔軟に構えて受け入れる。しかし、安易に飛び付くわけではない。また、新しいものが出てくることを恐れる必要もない。次々と現れては消えていくものを、強迫観念のように、すべて追い掛けて、結果追い切れないという状況は、技術者としてむしろマイナスになるのではないか。

「振り回されてはいけないんです。それに、本質的な部分を知っていれば振り回されることもありません」

昔はコンピューターを取り巻く時間は、ゆったり進んでいたかもしれない。黎明期^{れいめい}においては本質を理解しなければ前に進めなかった時代。

「われわれのもと先輩は、アセンブラでプログラムを書いていた世代。どうやってコンピューターが動いているかというのが叩き込まれていましたから、いろいろなプロダクトでも対応ができたのでしょう」

どんな新技術が現れても延長線上で理解でき、新しい時代にも活躍ができた。

「でも最近は、数カ月勉強しただけで分かってしまう。誰でもが使えるようにコンピューターが進化したので、逆に基礎を学ぶことができなくなっているのかもしれない」

この時代だからこそその若手たちの悩みは、ほかにもある。

「わたしの場合はDB2という25年経過しても使われている、

長いスパンで動く製品だったので恵まれていましたが、3年後に、今手掛けている技術が使われているのかどうかという点で不安に思うことも多いようです。なくなったらその後自分はどうするんだと」

現在のITの世界で、それは仕方のない流れなのかもしれない。

「ただ革命的な技術、製品といっても、やっぱり基礎となる技術や中身は、昔からの延長線上にあり、つながっているところはあるんですね。突然ポンと出てくるわけではないんです」

製品や技術の名前が変わっても、その次に手掛ける製品や技術で自らの知識、経験が活かされればいい。迷うことなく本質を追求すること。自らの経験とスピリッツを、若手技術者が集うコミュニティで発信する。

「製品の場合、『このファンクションはこういうふう動いているんだよ』ではなく、『このファンクションはお客様のシステムではこう使われていて、だからこういうパフォーマンスでなくてはいけなし、こういう使い方ができるようになってないといけないんだよね』というバックグラウンドを話そうと思っています」



本質が理解できれば、おれない。いろいろな優れた考え方、新しいものを受け入れることが楽しくなる。

業務以外のコミュニティ活動にも積極的に取り組んでいる。い

ろいろな部署の女性たちと共感し合うこと。「見ている方向が異なる」研究、開発者の話を聞くこと。そして都心のワイン・ビストロで、雪深い山形の温泉宿で、ワインを酌み交わしながら語らうこと。

「赤ワインがメインで、スパークリング・ワインも好きです。もちろんほどほどです（笑）」

会社の友人、会社以外の友人、旧友たちと、おいしいものを食べながらワインを楽しむ時間は、彼女にとって、至福で愉快で、そして忙しい毎日の中で、気持ちを切り替える大切な時間。

「銘柄はほとんど気にしません」

ボルドーの著名シャトーの伝統的で高貴な精神性も、南イタリアの快活な太陽の恵みも、チリの活気に満ちた若い造り手の野心も、日本のワイナリーの心にしみる温かさも、同じように好んでいる。ワインは楽しく飲めばいい。いろいろな考え方があってもいい。いろいろな楽しみ方があってもいい。でも、自分にとっては、楽しい時間をくれる存在。それはこれまでも、これからも変わらない、ワインとの向き合い方。

「普段会社ではコンピューターの話が主な分、ほかの世界の方と話すとき意外な話が聞けて本当に楽しいんです」

5大シャトーがあって、新世界のワインがあって、身近な日本のワインがある。評判や最新のトレンドは気にしない。今日も変わらず、そこに、気分のワインがある。それが、大切なこと。